

Bring Me a Unicorn

Anne Morrow
L I N D B E R G H

ユニコーンを私に

1922～1928 アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙



アン・モロウ・リンドバーグ

[翻訳] 中川 経子



発行 美術の図書 三好企画

発売 (株)求龍堂

母に代わって

アン・モロウ・リンドバーグの娘として、母の手紙と日記が2冊、日本の読者の方々に紹介されることを知り、喜びでいっぱいです。母は1931年に初めて日本を訪れ、その「国」と「人々」の両方に魅せられてしましました。その時、母は私の父である、パイロットのチャールズ・オーガスタス・リンドバーグと共に、ロッキード・シリウス水陸両用機で、ニューヨークから東京への北太平洋航空路の調査飛行中でした。

私の母は今世紀の初めに生まれ、20世紀も終りに近づく今と比べれば、当時は、女性の生活には遙かに自由がなかったにもかかわらず、子供の頃から男性の世界で成功をおさめるべく運命づけられている女性特有の、強い個性と非凡な自己規律を持っておりました。そして、母はその強さと深い美的感受性とを結びつけ、母の人生を通じて、また著作の至る處でその独特的想像力を育み、彼女の言葉を使って、世界中の人们の人生を豊かなものにしてきました。

まず、1冊目の『ユニコーンを私に』を私と同じくらいに、皆さんが楽しく読んで下さったら幸いです。私が初めて読んだ時には、母の家族に対する暖かい愛情、友達に対する深い友情、向学心、そして人生での満ち溢れる大きな喜びを持った、うら若き乙女としての母のことが、非常に良く理解できました。

母は、学問と正しい礼儀を是としていた厳格な家庭で育ったのですが、何かを書いて表現する場合の彼女は、実に率直で自由だったのです。それでも、家族は非常に仲が良く、ユーモアと善意に満ちていました。

メキシコで初めて父に出逢った時のことを、「この内気な青年は、公式のレセプションばかりが多すぎて、楽しみが無さ過ぎる」と、母とおば達は判断したのだと、母が私に言っていたことを思い出しています！

姉妹がリンドバーグ大佐を台所に連れ込んで、ミルクとソーダ・クラッカーを出してあげて、まるで家族の一員であるかのように、一緒に笑ったりお喋りをしたところ、父はみんなとリラックスして話すようになり、

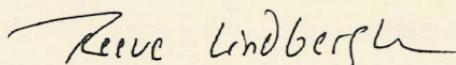
自分もメキシコでの日々を楽しめるようになったのです。あの有名な飛行の後で出会った人々の多くが、父のことを神聖な翼を持った神のように崇めたものでした。^{あが}一時期でも、自分と同じ年頃の人達と一緒に過ごし、普通に笑ったり、冗談を言い合ったりして、父はとてもほっとしていたのではないかと思います。

母は、父が「私と同じように兄弟姉妹を持ち、一緒に成長しなかったことを、いつも気の毒に思っていた」と申しておりました。父には異母姉妹がおりましたが、彼女達はずっと年上で、父が幼い時から別所帶著っていましたので……。両親が結婚してから、6人も子供を産んだのは、恐らくこういうことが理由ではないかと、私は思っております。母自身が子供の頃から知っていた家庭生活の“暖かいエネルギー”を再現し、父と本物の家族を築きたかったのです。

その反面、父と結婚したこと、今度は母が新しい世界に入りました。パイロットという父の職業は、技術的な能力、体力的なチャレンジ、そして精神の自由を兼ね備えたものであり、母を刺激し喜ばせるものだったのです。空の上では、学問も、礼儀正しさも、大使館の生活そのものも、何の意味もありませんでした。父と共に空を飛ぶことで、それまで知らなかった自由と、当時はほんの僅かな女性にしか開かれていなかった、まったく新しい技術の分野、そして彼女のうちに住む“詩人”と“哲学者”を魅了する陸と空の眺望を、母は知ったのです。それに何よりも、母は恋をしていたのです。いろいろな意味で、それは“天にも舞い上がるような経験”だったのです。

母が素晴らしい作家であることで、私はとても母に感謝しております。私も、そして世界中の方々も、その経験を母と分かち合うことが出来るのですから。

1996年12月



リーヴ・リンダバーグ
Reeve Lindbergh (絵本作家)

表題作者紹介

佐野 紗衣

青森県弘前市に生まれる。女子美術大学卒業。新制作展、女流画家展を主な創作発表の場としているが、頻繁に開催される個展を通じて広く多くの愛好家の共感を集めている。ことに、豊かな空間表現と美しい色彩の融和を示す抽象画の作品は高く評価されていて、数多くの受賞、文化庁の作品買上げなど輝かしい実績を残している。近年では東京ウィメンズプラザ壁画制作、読売新聞日曜版「女のしおり」の挿画を担当するなど、女流画家ならではの活躍が目立つ。現在、新制作協会会員、女流画家協会会員、女子美術大学教授。

ユニコーンを私に

1922~1928 アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙

1997年2月20日 発行

著者 アン・モロウ・リンドバーグ ©

翻訳 中川 経子

装画 佐野 紗衣

発行者 三好 寛佳

発行 美術の図書 三好企画

〒270 松戸市新松戸7-63 5C-622

電話 047(347)3211

発売 (株)求龍堂

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23 文藝春秋新館7階

電話 03(3239)3381

印刷 猪瀬印刷(株)

ISBN4-7630-9702-4 C0098

●乱丁・落丁本は、おとりかえ致します。

●本書の一部及び全部を無断で複写することは、著作権法で禁止されています。

Printed in Japan, 1997

Hour of Gold, Hour of Lead

Anne Morrow
LINDBERGH

ユニコーンとともに

輝く時、失意の時

1929～1932 アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙



アン・モロウ・リンドバーグ

[翻訳] 中川 経子



発行 美術の図書 三好企画

発売 (株)求龍堂

日本を愛する母に代わって

アン・モロウ・リンドバーグの娘として、私の母の手紙と日記が、日本の読者の方々に紹介されることを知り、喜びでいっぱいです。母は1931年に、初めて日本を訪れ、その「国」と「人々」の両方に魅せられてしまいました。その時、彼女は私の父である、パイロットのチャールズ・A・リンドバーグと共に、ロッキード社製のシリウス水上飛行機で、ニューヨークから東京への北太平洋航空路の調査飛行中でした。

母もパイロットでした。1931年に母が日本に着いた時には、副操縦士と無線技師としての任務に没頭し、父と同等のパートナーとして雲の中から降りて來たのです。この飛行では、夫と共に忙しく働き、無線通信の全責任を負い、また父が仮眠をとる場合には、いつも交替して飛行機を操縦していました。その他、燃料タンクの残量を確認し、飛行の方角を地図とコンパスで確認する仕事を二人で分担しあい、夫と協力して常に自分達の航空路上の気象状況を把握するように努めました。大学を出て間もない若き女性であり、詩人であるアン・モロウ・リンドバーグは、空の上では、どの男性の飛行家にも負けない専門家だったのです。しかし地上に降りてからは、彼女は再び作家に戻り、日本人の生活に対する姿勢の美しさときめ細かさを、こよなく賞賛したのです。

母は、「日本人の一人一人の中に芸術家がいた」と、初の日本訪問の後で記しました。「その手が触れた跡はあらゆるところにあり、博物館の宝物の中だけに留まらない。最も簡素な着物の中にも、筆の跡にも、街中に花のように開いた青や赤の日傘にも、食事のためのありふれた食器にも……。日常で使う〈紙と紐〉でさえ、その手によって芸術的なものに変えられるということに、私は気づき始めた。」(『東方への空の旅』1935年、ハーコート・ブレース社 ニューヨーク)

私の母は、簡素な生活の真価と美しさを愛し、その著書『海からの贈りもの』に書きましたが、母にとってこの日本訪問は、彼女自身の精神

とぴったり一致する〈文化〉に初めて触れるものとなりました。

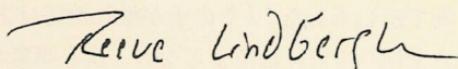
私が少女時代を過ごしたコネティカット州の家には、かつての日本訪問を思い起こさせるものがたくさんありました。たとえば、今でも母の部屋の壁には、額に入った2枚の浮世絵版画があり、クローゼットには、鶴の刺繡のある青と白の着物が掛かっていて、母はそれを特別の席に着ていました。

私の国では花を生ける時には、花瓶に花をぎっしり詰めて挿すのですが、母は窓際にある首の長い水指しに、シンプルでこの上なく美しく花開いている枝を1本だけ挿すのが好きでした。

アン・モロウ・リンドバーグが、1930年代の初期に飛行機で日本へ飛んで行ったことは、日本人の日々の生活の整然とした営みの中にある「簡素さ、美しさ、たしなみ」という、日本の特質を認識し、母自身の中にもある同じ特質を改めて認識することになりました。つまり、自分がいったいどんな人間であるのか、そして、自分の著作で何を世界に知らせるべきなのかを再認識したのです。

この母の才能を、再び日本の方々と分かち合えることを本当に嬉しく思います。

1997年1月



リーヴ・リンドバーグ

Reeve Lindbergh (絵本作家)

装画作者紹介

佐野 紗衣

青森県弘前市に生まれる。女子美術大学卒業。新制作展、女流画家展を主な創作発表の場としているが、頻繁に開催される個展を通じて広く多くの愛好家の共感を集めている。ことに、豊かな空間表現と美しい色彩の融合を示す抽象画の作品は高く評価されていて、数多くの受賞、文化庁の作品買上げなど輝かしい実績を残している。近年では東京ウィメンズプラザ壁画制作、読売新聞日曜版「女のしおり」の挿画を担当するなど、女流画家ならではの活躍が目立つ。現在、新制作協会会員、女流画家協会会員、女子美術大学教授。

ユニコーンとともに 輝く時、失意の時

1929～1932 アン・モロウ・リンドバーグの日記と手紙

1997年2月20日 発行

著者 アン・モロウ・リンドバーグ◎

翻訳 なかがわ みちこ
中川 経子

装画 佐野 紗衣

発行者 三好 寛佳

発行 美術の図書 三好企画

〒270 松戸市新松戸 7-63 5C-622
電話047(347)3211

発売 (株)求龍堂

〒102 東京都千代田区紀尾井町3-23 文藝春秋新館7階
電話03(3239)3381

印刷 猪瀬印刷(株)

ISBN4-7630-9703-2 C0098

●乱丁・落丁本は、おとりかえ致します。

Printed in Japan, 1997

●本書の一部及び全部を無断で複写することは、著作権法で禁止されています。